

この池こそ我賀池である

赤池

昔むかしのことでした。世は乱れ、国内では各地で争いが絶えませんでした。疫病もやはり、盗賊もたくさんいて、村人は昼も夜も不安におびえながら暮らしていました。

これは、そんな国を治めようと、日本武尊が諸国を巡っていた時のお話です。

当時、朝廷に従わなかった南九州の豪族「熊襲」を征伐しようと、

日本武尊が南へ向かう途中、この地を訪れていたときのことでした。

城田郷岩屋（現在の福智町弁城岩屋）の洞穴に

「大ごう」「小ごう」という麻剝が立てこもっていました。

日本武尊はこの「大ごう」「小ごう」を討とうとして、何度も岩屋に向かうのですが、

当時ここには熱病をおこす瘴気（毒気）が多く、近づくと軍の人も馬も倒れてしまいます。

日本武尊はどうしても討ち取ることができず、たいそう悩んでいました。

ある夜のことです。眠りについた日本武尊の枕元に神様が現れ、こう告げたのです。

「この近くの貴船山の北麓に湧き出る霊水を漕ぎに盛り、軍に持たせよ。

さすれば瘴気は消えるであろう」

翌朝、日本武尊はさつそくその地へ赴き、漕ぎに霊水を入れて岩屋へ向かいました。

するとどうでしょう、瘴気はうそのように消えて、

見事、「大ごう」「小ごう」を討ち果たすことができたのです。

九州各地を平定した日本武尊は、再び霊水の湧き出るこの地に立ち寄り

「あれは、まことに不思議なことであった。この池こそ我賀池である」と、

軍士を助けた命の泉を前にして言ったとか。

この「我賀池」が、のちに「赤池」へ変化したと伝わっています。

また、「説には「阿伽」は佛語で「浄水」を意味することから、

ここにかつて浄水池があったために「阿伽池」が

「赤池」になったのではないとも言われています。



※ 日本武尊は古代伝説の英雄で、景行天皇の子、幼名は小碓命。「古事記」では「倭建命」と記されています。
※ 熊襲は熊曾とも書き、現在の熊本と鹿児島あたりを治めていた一族。
※ 麻剝は今言う山賊か、朝廷に従わなかったものだと考えられています。

上がり野かな

上野

町の象徴である福智山、わたしたちの心を癒すふるさとの原風景です。

これは日本武尊が九州征伐の途中、一帯の地形と状況を見渡そうと、この国見山（福智山）へ登る際のエピソードです。

一歩一歩上つてゆく山のふもとで、日本武尊が「上がり野かな」と言ったとか。

この言葉にあやかって、里の人はこの地を「上り野」と呼ぶようになり、後に「上野」へ変化したと伝えられています。

椎の古大樹多し、椎木田

鋤木田

明治20年に「上野村」と合併した「鋤木田村」の由来は、上野にある興国寺の古書にあると上野村誌に記されています。

それによると、昔ここには古い椎の大木がたくさんあって「椎木田」と呼ばれていたものがしだいに変化して、「鋤木田」

になったということです。また「鋤木田」を含むかつての荘園の名「木田荘」とも関わりがあると考えられています。

水運による市の市津、高貴な方が眠る草場

市場

「市場村」は「市津村」と「草場村」が明治22年の合併で、その二文字ずつをとって誕生しました。

ここでは「市津」と「草場」それぞれの由来を見てみることにしましょう。

その昔、市津には常時「市（市場）」が開かれ、たいそうにぎわったといえます。

「津」は水運によって来た所、交通の要衝という意味があり、全国にも「津」のつく地名はたくさん見られます。

「市」と「津」いわゆる「水運による交易で市が開かれた場所」ということから「市津」の名で呼ばれたと伝わっています。

やがて「いちづ」の呼び方が言いずらいので、しだいに「いちぢ」に変化したと考えられています。

また、草場という地名は、よく高貴なかたを葬った場所につけられているそうです。

実際に草場には、かつて尊良親王（後醍醐天皇の皇子）ゆかりのかたを葬ったと伝えられる「鬼塚（御塚の転訛）」があります。



Picture: Fumi Sugisaki